

「プロサバナ事業では何も解決しない。国を食べさせていく（国の食料を支えていく）のは家族農業である」―土地に関する国際会議でスピーカー達は断言

**“O PROSAVANA NÃO É A SOLUÇÃO. A AGRICULTURA FAMILIAR É QUE VAI ALIMENTAR O PAÍS” – AFIRMAM ORADORES NA CONFERENCIA INTERNACIONAL SOBRE TERRA**

<http://www.unac.org.mz/index.php/7-blog/69-o-prosavana-nao-e-a-solucao-a-agricultura-familiar-e-que-vai-alimentar-o-pais-afirmam-oradores-na-conferencia-internacional-sobre-terra>

**ORLANDO NHABETSE**

on Seg novembro 2013.

2013年11月発行

オルランド・ニャベツェ



小農や家族農業の生産者らは、読み書きもできない人達と呼ばれているが、彼らだけがモザンビークを食べさせていくための生産に従事する。プロサバナ事業や、その他失敗に

終わった施策は、モザンビークの食料危機や発展のための最良の解決策ではない…これが、プロサバンナ事業について、「全国農民連合（UNAC）」が主催する「土地国際会議」のパネリスト達が行き着いた結論である。

「モザンビーク人権連合（Liga dos Direitos Humanos de Moçambique）」会長であり、会議のスピーカーの一人であったアリス・マボタ（Alice Mabota）は、農民達が自らの権利を主張した際に、彼らを文盲扱いした政府の態度を非難した。そして、過去にモザンビークで実施されたその他の農業開発プログラムと同様、「プロサバンナ事業は失敗するだろう」と断言した。

「たとえプロサバンナ事業が当面継続しても、我々は我々の生産を続け、同事業はそのうち失敗に終わるだろう。たとえ、読み書きもできない人と呼ばれても、我々の農民にはそれぞれ思いや考えがあり、そのことに効力があるのだ。学校に通わず哲学者になった人もいるが、我々は今そういった哲学者に学んでいる」とマボタは語った。

更に「農民は、利益獲得のための商業主義的な農業は知らないが、農業はコミュニティのメンバー間の交換プロセスであることを知っている。しかし、政府や投資家は、常にお金のことばかり考えてきたから、我々に事業家であることを要求するのだ」と、マボタは述べた。

そして、全国で確認されている小農の農地の収奪に関する強まる一方の潮流について批判した。「入植者でさえ住民の土地の権利は尊重していた。入植者は我々の土地を占拠したが、生きていくために必要な食料生産のための農地部分を住民が持ち続ける権利は重んじていたのだ。政府が同じ選択をすることの何がそんなに大変なのだろう」と疑問を投げかけた。

人権連合会長は次のように助言する。農民は土地を守る闘いを有利に進めるため、もっと組織化を進めるべきだ、なぜなら、これは「農民に何も残さずに転売目的で全国の土地を集積し続けている人達」を相手にした闘いなのだから、と強調した。

ブラジルではそのようにして農民が土地を失った。モザンビークも例外ではない。

一方、ブラジルの「土地なし農民運動(MST)」のアウグスト・ジュンカル(Augusto Juncal)は、土地問題についてはモザンビークもブラジルも大きな違いはない、と言った。違いと言えば、ブラジルの方がこの問題を長年に亘って抱えてきたということである。アウグストは言う、「ブラジルも独立後 400 年以上もの間、農地改革が実施されたことはなかった。なぜなら、入植者達がブラジルから出て行かないからだ。肌の色は関係ない！まだ、入植

者達は存在する、ただ、活動形態は変わっただけだ。」

大土地所有者のいるセラードが存在し、世界第 6 位の経済大国であるにもかかわらず、ブラジルは極貧層の解消を実現したことがない、とジュンカルは断言する。「ブラジルには 1700 万人超の飢餓に苦しむ人達がいる。明日何を食べたらいいのかわからない人達がいる。大土地所有者の生産物は綿、サトウキビ、大豆などであり、それらは輸出に回るのだ」ジュンカルは強調した。

彼は、プロサバナ事業はモザンビーク人を飢餓から救うことはない、と説明しモザンビーク農民の注意を引いた。「ブラジルで土地の破壊・篡奪を引き起こした張本人達が植民地化のため世界で勢力拡大を続けている。彼らはプロサバナ事業を引っ提げてこのあなた方の土地にやってきたが、これだけは言える。それで飢えがなくなることはない。単にあなた方の土地を篡奪するだけに終わるだろう」

「アンゴラ環境・農村開発アクション(ADRA)」のギリエルメ・サントス(Guilherme Santos)は、アンゴラでは石油が経済の決定要因で、農業は脇に追いやられていると言う。「私の国では、農業が政府のプロジェクトに含まれることはない。石油だけが含まれる。彼らは農業こそがアンゴラという国をつくったことを忘れていて。今日、情報技術への投資が行われているが、農業は短い柄の鋤で耕され続けられているにすぎない」

サントスは断言する。アンゴラの農業は深刻な問題を抱えている。我々は土地へのアクセスはあるが、土地の使用権は法的に認められていない。そのことは、政府の政策は農業にないことを示している。農作業にインセンティブが与えられないので、農村の若者は街に出て行く。」

サントスは、何百万人もの人々を飢えと貧困から救う実行可能な代替手段として家族農業生産の農業技術の存在を主張する。彼はまた、アフリカの家族を持続的に支える基盤を提供する家族農業生産者の権利擁護において市民社会の重要性を指摘した。